

【目的】咀嚼能力の高さは高齢者の健康，延いては生活機能の高さとの間に関連性があることが示唆されることを既に報告した．本研究では再度咀嚼能力と生活機能の関係について調査するとともに，咀嚼に対する認識や身体活動との関係についても併せて検討した．

【方法】岡山市およびその周辺の地域の高齢者（65歳以上）で施設に在園する者，デイケアを受けている者，あるいは趣味の集まりなどに積極的に参加しながら通常の日常生活を送っている者211名（♂56名，♀155名）を対象とした．歯の現状，咀嚼についての認識，生活機能は面接調査により，咀嚼能力は溶出糖量（チューインガム法）により，身体機能については握力計と棒落下テストにより評価した．生活機能については，老研式活動能力指標を用い，調査前6カ月以内に実際に行ったか否かについて調査した．統計処理は対象者数が少ないのでほとんどの場合♂♀合計で行った．

【結果】1)対象者の歯の現状は，現在歯のみ10.4%，局部義歯33.7%，総義歯53.1%，無歯顎2.8%であった．2)歯の現状別の咀嚼能力は現在歯のみの0.63gを最高に，以下局部義歯，総義歯，無歯顎の順であった．3)平均活動能力得点（13点満点）は9.3点を最高に咀嚼能力の場合と同順であった．4)平均握力は♂，♀間に差が認められたが，共に局部義歯>現在歯÷総義歯>無歯顎の順であった．5)大，小臼歯の現在歯数が多い者ほど総現在歯数も多い傾向が認められたが，活動能力得点も高く，0歯では6.8点，1～8歯では8.0点，6～19歯では8.9点であった．咀嚼についての認識得点の上昇に伴い溶出糖量も僅かに増加する傾向が認められた．咀嚼能力と棒落下テストとの間の相関は低かった．